

# 使命のストーリー

(なぜこの仕事をしているのか?)

「造った家に温かみがある。山六さんのみなさんが温かいから、もっとプラスアルファで温かい家ができる」と、お客さんが笑顔になることが、私のよろこびです



なぜ、わたしがこの仕事をしているのか、その「想い」を聴いていただけますか？

田邊 睦美

こんにちは！

「気さくで話しやすいので、田邊さんという人が好き」と言われる、お家プランナー田邊睦美（たなべむつみ）です。

「造った家に温かみがある。山六さんのみなさんが温かいから、もっとプラスアルファで温かい家ができる」とお客さんが笑顔になることが、私のよろこびです。

そのために、「ちゃんと私達に合った暮らしを考えてくれる」と言われるように、心がけていきます。



**なぜ、わたしがこの仕事をしているのか、その「想い」を聴いていただけますか？**

**「もっとがんばろう！」**

「友達も習っているから、あなたも習字やってみたら？」  
母のすすめで、小学1年生から3年生まで、わたしは習字を習っていました。幼稚園から仲の良かった友達も習うというので、習うことにしました。友達と一緒に通うことが、とても楽しみでした。

字を書いたら、先生のところに持って行く。大きく書けていると、先生は「いいね！」と言ってくれる。思わず、「やったあ！」とよろこんでいました。

ある時、全国の習字塾の広報誌に載ったのです。「載ったよ！」と、真っ先に両親に報告しました。両親も「よかったね」とほめてくれたことが、とてもうれしかったです。

小学4年生から、学校のミニバスケットボール部に入りました。2歳上の姉も入っていたので、母から「一緒に入ってみたら？」とすすめられました。

毎日がバスケの日々。わたしは足が速かったので、バスケットも上達していきました。練習では、コーチから言われたことを、素直に一生懸命やる。そんなこともあり、6年生のとき、副キャプテンに選ばれたのです。

いつもクラスの班長とか委員長に選ばれていたのですが、わたしは「なにか選ばれる運命なんだな」と思いました。ところが、コーチからは「副キャプテンなのに、なにやってんだ！」、「なんだその動きは！」とよく怒られました。

試合になると、急に交代させられて、コーチから「外を5周走って来い！」と言われる。戻ってきたら、休みなく試合に戻られる。くたくたになって走っていることが、たびたびありました。

「なんで、わたしだけ？」と思っていたのです。

母は、毎日部活動を見に来ていました。母に監視されているようで、「イヤだな」と思っていました。かっこわるい姿を見せるのもいやでした。

家に帰っても、母から「なんでもっと走らないの」と言われるのです。「外を走らされて、くたくただったんだから」と言いたいことを言えず、さらに心がボロロ。

そんなとき、父が黙ってぎゅっと抱きしめてくれて、泣いていました。

そんなミニバスケットボール部でも、試合でうまくできたときは、母はほめてくれました。

「よかったね」

母から、たった一言言われるだけで、「やったなあ。もっとがんばろう！」という気持ちになったのです。



### 「もっとわたしのこともわかって」

中学校でも、バスケットボール部に入りました。本当は、姉が陸上部だったので、わたしも陸上部に入りたいかったです。

ところが、母から「みんなバスケ部に入るから、バスケ部に入りなさい。なに

より上手だし」と言われたからです。バスケットが得意だから得意なところを伸ばしてあげたいと母は思っていたのです。

わたしの入った中学は、大会ではつねに上位にいる強豪校でした。練習がとても厳しかったです。また、3人もいた先生ともウマが合いませんでした。3人とも指導内容が違うのです。「どの先生の言うことが正しいの？」と困惑していました。

中学2年生のとき、小学校のときと同じように、副キャプテンに選ばれました。先輩方が話し合いで決めたのです。先輩に呼ばれて「副キャプテンに決めたから」と言われました。「わかりました。ありがとうございます」とだけ、わたしは答えました。

わたしは2年生からレギュラーだったので、「なるべくしてなったのかな」と思いました。でも、同級生とたえず競争しながらレギュラー争いをするのが、楽しくなかったです。

高校では、剣道部のマネージャーになりました。中学の部活で膝を怪我していたのです。もう、バスケットボールのような運動量が激しい部活には入れませんでした。

高校に入って仲良くなった友達が、中学校で剣道をしていたのです。「一緒に入ろう！」と剣道部に誘われました。でも、プレイヤーにはなりたくなかったし、また副キャプテンになるのも、いやでした。それで、マネージャーになる選択をしたのです。

そもそも、チームメイトの中で競争したり、厳しい練習はもうイヤでした。「もっと自由にやらせて！」とっていました。なにより、人に言われるまま生きること、息苦しさを感じていたのです。

剣道部は人数も少なかったため、みんな仲が良かったです。友達と楽しく遊んでいることの延長のような雰囲気でした。顧問の先生も優しかったです。

わたしがしていたマネージャーの仕事は、試合のタイマーを測ったり、練習を見ながら部員に声をかけることでした。大会の時は役員として、先生のお手伝いをしていました。

仲良くなった友達と一緒にいられることが、なによりも楽しかったです。部活の帰りにアイスを食べに行く。そんな中で、気兼ねなく、なんでもおしゃべりできる。

「あのとき、楽しかったね」

いまでも、高校の同級生とは、そう話します。

小学校、中学校、高校の生活を振り返ってみると、わたしは、気心が知れて、気持ちをわかり合える友達が欲しかったんだなと思います。スポーツのプレーだけで繋がっている関係ではなく、自分が思っていることをわかってもらえる関係を欲していたんだなと思います。

「もっとわたしのこともわかって」

### 「自分の気持ちに、誠実に向き合っていれば…」

小学校から高校までを振り返ったとき、中学のときが、一番辛かったです。中学生になるとバスケットボール部での練習も厳しくなりました。

また、1年生から3年生までずっと部内でいじめがあって、悩む日々が多かったのです。いじめの内容は、無視したり、仲間外れにすることです。そして、いじめの標的が次々に変わるのでした。

わたしも、自分を守るためにまわりの子と同じようにしていました。大勢に従っていれば、標的にならないと思っていたからです。

3年生になると、わたし自身がいじめられる番になりました。「陸上部に入っていれば、こんなことに巻き込まれずに済んだのに…」と後悔しました。

1、2年生の時に無視する側だったわたしは、先生から「おまえがいじめの主犯格なんだろう」と一方的に問い詰められたことがありました。「それは違うのに！何でわかってくれないの！」と悲しくなりました。

その次の日が、大会。わたしが行くと、コーチに「よくおまえ来れるな」という目線。家に帰って、母に大号泣しました。「全部わたしのせいにされている」。

母は「苦しかったね」と言ってくれました。やっと、母にわかってもらった、うれしくなりました。

その後も、わたしは無視され続けました。学校に行きたくなくて、不登校になったこともありました。

母は仕事で家にいない。そんな中、ご飯を作ったり、ネットサーフィンをしたり、一人で自由な時間を過ごしていました。なにも考えずに、いやなことから開放されるひと時でした。

母も「いやだったら、家にいて、好きにしていよいよ」と言ってくれたのです。「いままで、いろんなことを無理させていた」と母が思ったそうです。母の一言で、「よかった」と気が楽になりました。

学校を休んでいたある日、1年生のときコーチだった、男子バスケット部コーチのS先生が家に来てくれました。

S先生は、「どうしたんだ？」と聞いてくれました。そして、「休めば休むほど、学校に戻りにくくなるよ」と言うのです。

わたしも、「たしかに、そうだな」と思いました。母が帰ってきたら、話をしました。母も「あなたが行けると思ったら、行ってみたら？」と言ってくれました。

その翌日から学校に行くことにしました。最終的には、3年生の前半は、部活にほとんど行ってません。学校だけ行っていました。

その結果、中学最後の大会には出られませんでした。大会が終わったとき、「やっと終わった」と肩の力が、すっと抜けました。

不思議なもので、部活が終わった途端、同級生と仲良くなったのです。「化粧教えて？」とか「一緒に出掛けよう？」とか、声をかけられるようになりました。

いま振り返ってみると、わたしは有頂天だったのです。バスケットはできるし、優位にいるんだ、とつねに思っていたのです。できない人の気持ちやいじめられる人の気持ちがわかっていなかったのです。

「申し訳ないな…」

そんな気持ちが、強くわき上がってきました。

なにより、自分の意志が弱いことや、思ったことを口に出さなかったことが良くなかったのです。人に嫌われたくなかったからです。

ところが、思っていることと自分の行動が一致しないことが、とても苦しいと

ということが分かりました。

自分の気持ちに誠実に向き合っていれば、苦しみは感じなかったのに…。

そのことに気づいたとき、わたしに欠けていたのは【誠実】さだと気づきました。

【誠実】さが欠けていたことに気づいてからは、勇気を持って行動するようになりました。

それからは、何かを決める時は、先に自分の中で答えを出すようにしたのです。自分の気持ちを確認めて、その気持ちに従って、答えを出すようにしました。

この経験から、『自分のことは自分自身で決める』ということが大事だと気づきました。



### 「想いをわかりあうことで、お互いが幸せになる」

高校を卒業した後、わたしは福祉心理を総合的に学ぶために、大学へ進学しました。言葉にならない人の心理面に興味があったからです。

いじめの体験から自分の気持ちを見るようになったことと、中学の仲のよい友達もテニス部でいじめられて悩みを聞いていたので、より人の気持ちに興味があったのです。

大学で、福祉心理を学んだことは、人の心を知ること、とてもよかったです。

就職に当たって、インターネットで会社を探しました。ある日、就職サイトを見ていたら、『山六木材』という会社が気になりました。会社説明会の日程を見ると、翌日でした。すぐに面談の予約をしました。

当日、社長は完成見学会の予定が入っていました。それでも、見学会が終わると、会社へ飛んで帰ってきてくださりました。

会社の印象はすごく良かったです。アットホームな雰囲気、社長が来てくれたという点も、誠実さを感じて印象深かったです。ただし、「すごい田舎だなあ」と思いました。二度とここは来ることはないと思い会社を後にしました。

わたしが就職活動を進める中で、他にも何社か面接を受けました。企業面接で「学生時代の思い出」を聞かれたことがあります。他の就活生は「こんな素敵な友達に出会って・・・」「こんな活動してきました！」ということをしていました。わたしには、嘘で塗り固められた作り話のように感じられたのです。

わたしは作り話ではなく、誠意をこめた本当の話がしたかったため、「最近バスで救助活動をした」という話をしました。すると選考に落ちてしまいました。

その時に「自分を出したら、話したいことを話したら、受からないんだ」と思いました。「自分って必要ないんだ」と自分が否定された感じでした。そして、就活に疲れ切ってしまいました。

ところが、そんな時に山六木材の社長から「一緒に働きたい」という旨のメールを長文でいただいたのです。こんな企業があるのかと感動しました。

就活生としてではなく、一人の人間として見てくれたこと、知ろうとしてくれたことがうれしくて、入社を決め手になりました。

お家づくりでは、さまざまなお客さんの問題に直面します。まずはその問題を気づいてもらうことを心がけています。たとえば、両親に反対されている、お金が足りない、お金が借りれない、夫婦間で話していない、家づくりってわからないなど。

そのように、悩むことが多いお家づくり。その過程を心から楽しんでもらえるよう、打ち合わせは明るく楽しい雰囲気になるように心がけています。

「田邊さんという人が好き。気さくで話しやすくて人が好き」

「身近な工務店、アットホームで話しやすい雰囲気がいいな（笑）」



このように言っていただけると、とてもうれしいです。



お客さんに、現状の問題に気づいてもらうためには、お話をしっかり聞くように心がけています。お客さんが心の中で思っているけど、なかなか口に出せない悩みはないか。しっかりお話を聞いて、気持ちをきめ細やかにくみ取るようにしています。

また、丁寧に対応することを心がけています。ご予算よりも高いお見積りを出すときは事前に連絡して、心配したり不安に感じられないようにしています。お見送りの際は、お客さんが見えなくなるまでお辞儀することで感謝の気持ちをお伝えしています。

中学のときに、同級生に対して誠実でない、人の気持ちをくんでいなかった経験。また、思っていることを言葉にできなかった自分の経験が、大きく影響しています。

私はお家づくりではプロです。しかし、お客さんの希望に沿っているかどうか悩むことも、じつは多いです。その時は、【誠実】にお客さんに相談するようにしています。わたしがわからないところをお客さんに確認したり、こちらの考えが伝わっているか確認する。そうすることで、お互いが何を思っているかわかり合えるようにしたいと思っています。

「細かいこともひとつひとつ叶えてくれた。ここはこの高さで、ここは造作で作ってください、ここは板張りで、とか、全部イメージ通りです」

家が建ったあとに、このように言っていただくと、とても安心します。

そして、家を建てて1年が経過して、お客さんにこのように言ってもらえたら、最高にうれしいです。

「子供の姿が常に見れて、すごくいいです。しかも広すぎない。みんながきゅっと集まれる。『みんなが集まれる空間がいいよね』と主人としていたので」

「造った家も温かみがある。それって、山六さんのみなさんが温かいから、もっとプラスアルファで温かい家ができる」

「『この傷、あの時の傷か』と思い出も残る家。子供もその傷と大きくなって。大きくなってから『お前、父ちゃんあの時こうだったんだぞ』って言って。将来楽しみがある家だなって（笑）」

お客さんの家族が、このように笑顔になることが、わたしのよろこびです。そして、心の中の想いをわかり合うことで、お互いが幸せになる。お客さんを導く人として、そんな仕事を心がけています。

最後に、ひと言。

わたしは大学を卒業して一人暮らしを始めました。  
よく実家に帰ると、母が「寂しいよね」と言います。  
その言葉を聞くたびに、思います。

お母さん  
いつもわたしのことを気にかけてくれて、  
温かく見守ってくれて、ありがとう。

田邊 睦美

